

## 吃音を生きるということ ～子どもたちのレジリエンス～

千葉市立花見川第三小学校 黒田 明志

### 私とどもり

- ・大学時代、コンビニのアルバイトでことばが思うようにならない  
⇒初めて自分がどもることを意識する
- ・音楽の道を諦め、28歳でことばの教室の担当となる  
⇒どもる自分が、なかなか子どもとどもりの話ができないことを悩む
- ・吃音親子サマーキャンプで、自分のどもりについて語る子どもたちや、元気に生きる大勢のどもる大人に出会う  
⇒どもりを治さなくても、今のどもる自分のままで大丈夫だと確信する
- ・どもりについて、子どもたちと話せるようになったけれど、自分自身は無意識にどもりを隠していることが、次第に自己矛盾として意識される  
⇒教師としてこのままやっていけるのか深く悩み始める

### 当事者研究 私の転機

- ・吃音ショートコースで、どもる仲間の中で自分の悩みを語り、自分の助け方について、仲間と共に考える「当事者研究」と出会う  
※詳細は『吃音と当事者研究』（向谷地生良・伊藤伸二 2014）を参照  
⇒自分が悩んでいたのは、子どもと向き合い始めている証拠であり、今を一生懸命に生きているから。だから「このままでいい」
- ・当事者研究での語り（ナラティブ・アプローチ）を通して、「悩む」の意味付けが変わり、自分もつかに気付く  
⇒「自分を語ることば」「悩む力」が自分のレジリエンス

### レジリエンス

- ・レジリエンス (resilience)  
何かにつぶかったときに跳ね返す力、弾力  
回復力、立ち直る力、しなやかな折れない心
- ・レジリエンスは特別なものではない  
自分らしく生きようとする人なら誰もがもつもの
- ・ことばの教室（学校）で、子どもたちが自分の中に  
あるレジリエンスに気づく⇒生きる力につながる

## ことばの教室で大切にしていること

- ①子どもの気持ちや語りを聞く（安心できる場所）
- ②「自分を語ることば（悩みや自分を表現する）」を育てる  
「悩みがない」⇒「問題が大きすぎて言葉にできなかった」
- ③私自身も自分を語る⇒子どもと**対等な姿勢**で
- ④子どもたちの**小さなチャレンジ**を見守る  
もし失敗しても、それは子どもたちの**レジリエンス**になる

---

---

---

---

---

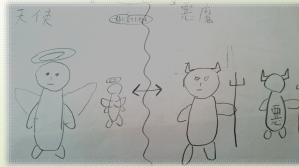
---

---

---

## どもる男の子（6年）の当事者研究

- ・当事者研究のテーマ「**頑張る自分と頑張れない自分**」
- ・彼の心に住む**天使（頑張る自分）**と**悪魔（頑張れない自分）**
- ・5年生のとき、学校を続けて休むことがあった
- ・6年生になり休まなくなった
- ・そのときの気持ちを考えたいと  
当事者研究をすることになった
- ・中学校進学に向けて自分を知る



---

---

---

---

---

---

---

---

## 当事者研究の中身

- 4年生 悪魔の存在にすら気付かなかった
- 5年生 悪魔の声がする、ほくにいやなことを言う  
「失敗するからやめた方がいいよ」「休んじゃえ」  
失敗を恐れて諦める 頑張れない自分がいやだ
- 6年生 悪魔の姿が見えるようになった⇒気持ちが楽になった  
父親とボルダリングに挑戦 児童代表の言葉  
「自分の失敗は経験になる」「自分で伝えたい」

---

---

---

---

---

---

---

---

## レジリエンスを育てる

- 「悪魔にもたまにはいてほしい」
- 当事者研究で私との語りを通して、彼の心の悪魔は決して邪魔者ではなく、必要な存在として考えるようになった
- 「今も悩むことはあるけれど、悩みと仲良くなった」  
「学校は間違えるところ」「休みは頑張るためのエネルギー」  
⇒彼にはレジリエンスの中の「**洞察**」「**創造性**」  
が発揮されているだろう

---

---

---

---

---

---

---

---